

アラビア語を母語とする日本語学習者における自動詞・他動詞の習得研究

—母語の影響をめぐって—

アブデルラフマーン エルハディディ (大阪大学大学院生)

1. はじめに

日本語では骨折したとき「足を折った」と他動詞を用いて表現する。しかし、アラビア語母語話者の筆者にとってこの文は理解に苦しむものであり、自分の意思で折っていないため、どうしても「足が折れた」と自動詞で言いたくなる。このように筆者自身の学習経験および日本語教師としての経験から、アラビア語を母語とする学習者のための「自動詞・他動詞」(以後「自他」)の研究の必要性を感じた。

2. 先行研究

母語転移についてはじめて触れたのは、ラドーである。Lado(1952)は「我々は、外国語を学習する際に母語や母文化で用いられる形式や意味、あるいはそれらが用いられる範囲を、外国語や外国の文化に転移させる傾向にある。」(筆者訳)と指摘している。

その後、英語、中国語における自他と日本語における自他の対照研究や第一言語転移をめぐる研究が石川(1991)、森田(2004)、張(2009)、角田(1991)、望月(2007)など数多くなされてきた。

英語を母語とする日本語学習者が日本語の自動詞より他動詞のほうが上手に使えるのは、英語母語話者は母語では自動詞より他動詞のほうが使い慣れているからであることが明らかになり(森田：2004)、また、中国語が複合動詞で他動詞を作って表現することから、日本語の他動詞の習得が自動詞に比べ困難であることも明らかになっている(張：2009)。

以上の先行研究では英語、中国語を母語とする日本語学習者における母語転移が明らかになっている。しかし、日本語の自他とそれに相当するアラビア語の自他の対照研究や第一言語転移をめぐる先行研究は筆者の管見の限りハッサン(2011)のみである。

ハッサン(2011)は、日本語とアラビア語における自動詞と他動詞について少し触れ、アラビア語では受け身と自動詞をそれぞれ別の語彙で表すのに対し、エジプトアラビア語(エジプト方言)では1つの語彙で両方の意味を表すことができると述べている。それ以上は述べておらず、またハッサン(2011)自体の研究の対象はアラビア語ではなく、エジプトアラビア語(エジプト方言)である。

また、中国語と英語は動詞の形態から自他の区別がない言語であり、アラビア語のように自他の区別がある言語を母語とする学習者における、自他の習得過程を明らかにすることが重要であると考えられる。

3. 日本語とアラビア語における自動詞と他動詞

3.1 日本語における自動詞と他動詞

寺村(1982)は自動詞、他動詞を、死ぬ、歩くなどのような「絶対自動詞」、殺す、切るなどのような「絶対他動詞」、閉める、閉まるなどのような「対のある自・他動詞」¹、閉じる、開くなどのような「両用動詞」、という4つの種類に分けた。寺村は日本語には対のある自他が非常に多く、両用動詞は非常に少ないと指摘している。

3.2 アラビア語における自動詞と他動詞

アラビア語で自動詞と見なされる動詞は、目的語を必要としない動詞、あるいは動詞と目的語の間に前置詞を必要とする動詞のことである。

アラビア語では自動詞から他動詞が派生、または、他動詞から自動詞が派生するという体系をもち、結果的に日本語のように形態的に似通っている対のある自動詞、他動詞が多い。例えば、kharaga (出る)という自動詞にA(ハムザ)をつけることで他動詞の Akhraga (出す)になる。

4. 調査

本調査では、日本語の自他は、①アラビア語を母語とする日本語学習者(本調査ではエジプト人に限定する)にとってどのような点で難しいか、②母語干渉を受けやすい表現はどのようなものか、③日本語能力が上達するにつれて、学習者の日本語の自動詞、他動詞の誤用はどのように変化するか、以上の3点を研究課題とし、2016年2月に調査を行った。回答をもとに学習者の誤用を分析し、第一言語の影響の諸相を考察した。

4.1 調査の対象者

カイロ大学、アインシャムス大学、ミスル大学、国際交流基金(JF)のアラビア語を母語とする日本語学習者、あわせて110人である。その内訳は2年生レベル(中級前半)の学習者が53人(みんなの日本語初級終了)、3年生レベル(中級)の学習者が21人、4年生レベル(上級)の学習者が36人である。

4.2 調査の概要

先行研究(守屋：1994)を参考にアラビア語母語話者日本語学習者の誤用が多く見られると推察される問題を設定した。調査表を配布し、「自動詞・他動詞」および「が、を」いずれかの正しいと思うものを選ぶように指示した。対のある自他を混同していないかについても調査するため、選んだ理由や、自動詞のつもりで選んだか他動詞のつもりで選んだかについても書くように依頼した。また、学習者が各動詞によって自動詞および他動詞のどちらをより頻繁に選ぶ傾向にあるか確認するため、自動詞・他動詞両方が正解となる問題もいくつか調査票に含めた。

JFの学習者以外はフォローアップインタビューを行った(JFの学習者は社会人が多く忙しいため)。フォローアップインタビューの内容は、選択した理由、自動詞・他動詞の難しさ、についてである。

5. 調査の結果と考察

本研究では2年生レベル(中級前半)の学習者の調査結果について論じる。中級前半の学習者の回答を分析し、以下のことが明らかになった。

5.1 対のある自他の混同

学習者の回答には、対のある自他の混同が多く見られた。混同の多い順番に、「伸びる、伸ばす」、「並ぶ、並べる」、「焼ける、焼く」、「変わる、変える」、「落ちる、落とす」「治る、治す」、

「ひらく、ひらける」、「売れる、売る」「あたたまる、あたためる」「壊れる、壊す」「割る、割れる」、「閉まる、閉める」、「はじまる、はじめる」「届く、届ける」となった。多くの学習者が自動詞の形を他動詞のつもりで選ぶ、あるいは他動詞の形を自動詞のつもりで選ぶという誤用をしていた。つまり、多くの学習者がそれぞれの文脈で自動詞を使うのか、他動詞を使うのかを知っているにもかかわらず、自他の形を間違えて誤用を起こすことがフォローアップインタビューや学習者のコメントで分かった。

5.2 使用状況の違いによる誤用

5.2.1 日本語で他動詞を使用するが、アラビア語で自動詞を使用する(使用状況の違いによる誤用)

日本語では「財布を落とす」などの失敗をあらわす表現を他動詞で表すことがある。調査では(お腹を壊す、壊れる)、(病気をする、なる)、(足の骨を折る、折れる)、(財布を落とす、落ちる)という問題の誤用が多く見られた。いずれの問題でも失敗あるいは責任という概念が共通している。この場合、日本語では他動詞が多く用いられ、自分の失敗、あるいはある人の失敗を表す(石川：1991)。

しかし、アラビア語においてはこの場合、自動詞が用いられる。特に病気の場合は他動詞を使わない。まず、(お腹を壊す)の問題の場合、アラビア語においてこのような表現はなく、お腹が痛くなったという結果を重視している。例えばこの例だと、「*ladaya alam fi batni*」(お腹に痛みがある)のように自動詞的な表現が用いられる。あるいは「*batni tolemoni*」(お腹が私を痛めている)というお腹が対象語ではなく、動作主であり、自分は動作主ではなく対象語である。

(病気をする)という問題に関して、アラビア語では(病気をする)という表現がなく、「*yosbeho maridan*」(病気になる)あるいは英語の *sicken* のような動詞「*marida*」で表現する。

(財布を落とす、落ちる)の問題の場合、アラビア語では「*askata almehfaza*」、(財布を落とす)も、「*sakatat almehfaza*」(財布が落ちる)も言えるという点で以上の例とは少し違う。これは言語的には両方の言い方があるが、実際に自動詞の(落ちる)で表現するほうが多い。

5.2.2 日本語で自動詞を使用するが、アラビア語で他動詞を使用する(使用状況の違いによる誤用)

事態の成立に注目する表現は①と逆で、日本語において、自動詞が用いられ、アラビア語において他動詞が用いられる動詞である。調査では(論文のテーマを決める、決まる)、(電話をかける、電話がかかる)、(結婚することにした、結婚することになった)、(探していた本、見つける、見つかる)という問題に関する誤用も多く見られた。いずれの問題でも事態の成立に注目する表現である(守屋：1994)。

まず、(論文のテーマが決まる)は、アラビア語では自動詞で表現できないことはないが、他動詞の「決める」で表現するほうが自然でより使用されている。(結婚することにした、結婚することになった)という問題も同様である。

(電話をかける、電話がかかる)という問題の場合、アラビア語で「*honaaka shakhsun etasala beka*」(あなたに電話をかけた人がいる)と表現する。あるいは「*jaa laka etesalan*」(あなたに電話が来ました)と表現する。アラビア語には「電話する」という意味の「*yataselu*」という自動詞しかなく、また動作主には人間しか取ることが出来ない。そのため学習者は「電話がかかる」という、動作主が「電話」である表現を使わず、「電話をかける」という、動作主が人間である表現を選んだと考えられる。(探していた本、見つかる、見つける)の問題は、まずアラビア語には「見つかる」という自動詞がなく、

受身の「wojeda」(見つけられる)で表現できる。これが、学習者が「見つかる」を選ばなかった理由であると考えられる。

6. 結論

アラビア語を母語とする日本語学習者における自他の誤用は 2 種類に分けられると考えられる。①形による誤用、と②両言語における自他の使用状況の違いによる誤用である。①は母語に関係なく、学習者が自分で作るルールによるものだということが、学習者のコメントやフォローアップインタビューで分かった。一方、②は学習者の誤用と学習者の母語であるアラビア語との関係がはっきり見える。自他動詞を教える立場にある日本語教師は自他を教える際に、アラビア語と日本語における使用状況の違いを把握したうえで授業を行い、その違いに学習者に気付かせることが自他動詞の指導方法における提案としてあげられる。

学習者の日本語能力が上達するにつれて、学習者の日本語の自動詞、他動詞の誤用はどのように変化するか、また日本語のように自他が形態的に似通っているアラビア語の、日本語学習への正の影響があるかを今後の課題とする。

注¹ 寺村(1982)では「相対自/他動詞」という用語を用いているが、本論文では用語を統一するため「対のある自他」と表記する。

【参考文献】

石川守(1991)「自動詞と他動詞の用法について—一人の視点と物の視点に関して—」『語学研究』 64号: 35-80.

寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版

張麟声(2009)「日中両語の自・他動詞の対照研究」第 12 回中国語話者のための日本語教育研究会

ハッサン, エバ (2011)「エジプトアラビア語における動作主の脱焦点化について」『一般言語学論叢』

第 14 号, 65-89, つくば: 筑波一般言語学研究会

守屋三千代 (1994)「日本語の自動詞・他動詞の選択条件—習得状況の分析を参考に」 『講座日本語教育』

第 29 分冊, 早稲田大学日本語研究教育センター, pp.151-165

Almubarrad.(1994) *Kitab almuqtadab*, Ed by Muhammad Abdelhaliq Udayma 2 vol. Cairo, wizarat al-awqaf ,

lajna ihya al-turat al-islami

Lado, R.(1957) *Linguistics across cultures applied linguistics for language teachers*. University of Michigan

Makiko Morita.(2004) *The Acquisition of Japanese Intransitive and Transitive Paired Verbs by*

English Speaking Learners: Case study at the Australian National University, 『世界の日本語教育』 14, pp.167-192

Muhamad Muhyidin 'Abd al-Hamid.(1980) *Sharḥ Ibn 'Aqīl 'alá Alfīyat Ibn Mālik*, Dāral-Turāth Cairo

Sibawaih.(1996) *AL-Kitāb [The book]*, 3rd edition, Revised by Haroon Abdel-Salam, Cairo, Vol4, Al-Khanji Publishers